

放送人の会

No. 3. 1998. 9. 7

放送人の会 会報

〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町1-1

千代田放送会館3階

電話・FAX (03) 3221-0019

始動！ 二つのイベント終わる

「放送人の会」主催および後援の二つのイベントが、六月から七月にかけて実施され、関係者の熱意も尽力により、予想を超える成果をあげた。

内容は会報No. 2で既報の通り。

六月十三日、増上寺では四百人もが客席を埋め尽くし、六人のキャスター四時間半の激論に湧いた。

六月十九日から毎金曜午後、愛宕山NHK放送博物館での研究シリーズ&シンポジウムには、第二日目コメンテーターに池松俊雄氏が加わったこと、最終日シンポジウムは、石川栄吉・鈴木嘉一・市岡泰子・村木良彦の四氏をパネリストに今野勉幹事司会で「記録する者の精神を見つめて」と題し、客席からの発言も含めて意義深い意見交換が見られたこと、及び、川口幹夫会長はじめシンポ参加者に加えて夕刻から駆けつけた会員も共に、懇親会を開き、記録される側・被取材者の人権心情への配慮についての反省考察がなお続いたこと、を報告する。六日間入場者数は次の通り。(平原幹事調べ)

- 第1回 約八〇(六四)
- 第2回 約六〇(五四)
- 第3回 約九〇(六九)
- 第4回 約七〇(五八)
- 第5回 約八〇(六一)

(内・資料費支払回数)

「研究シリーズ・放送人の世界 第一回

牛山純一・上坪隆 / 人と作品

「THE・TVキャスターズ・ライブ・

イン・増上寺

第6回 約五〇(三四)

つぎをめざして

事業担当幹事 今野 勉

金曜日の午後という参加しにくい日程で、しかも六回という長丁場で、それも酷暑と大雨に交互に見舞われるという中で、今回の牛山純一、上坪隆両氏の作品上映会とシンポジウムが催されたのですが、毎回、会場は、作品とそれを見つめる人々の間に交錯する熱い想いで満たされました。

ひとりの制作者の産み出した作品群が、その人の生涯や人となりすべてを表現するというほど、人間の存在は単純ではないということは重々承知しているつもりですが、それでもなお、時系列で並べられた作品群からは、牛山純一さんや上坪隆さんの人間味が圧倒的な存在感を持って立ちあがってきました。牛山さんの作品は、各回三時間ないし三時間半で四回、上坪さんの作品は一日でした。約五時間一挙に、上映されました。放送時に見るのはまた違って、こうしてまとめて見ると、確かにそこに生き続け、作り続けている制作者の存在を実感します。その意味で、放送人の会の最初の(次頁一段目へ続く)

愛宕山皆勤記

個人の能力と時代のオリジナリティ

北村 美憲

今年の六、七月、金曜毎に前後六回、わたしが通った愛宕山のNHK放送博物館は、ずっと雨に煙っていた。そのホールで開かれた「放送人の会」主催の初の「研究シリーズ」牛山純一・上坪隆の世界」に、主催者以外で皆勤したのは、たまたま時間に恵まれた私一人だったらしい。

牛山と九人のディレクターによる十六作品と上坪の五作品、合計二十一本のドキュメンタリー番組を見るのが出来た。一九六〇年代から八〇年代前半に作られたものである。かねてテレビの番組には相当の関心を懐いてきたつもりなのだが、前に見たことのあるのはそのなかのたった三本、あとはまったく初めて目にするものばかりだった。

たとえば「NHKムスタン事件」の際、ここで紹介された「鳥葬の国ムスタン」(杉山忠夫・一九七七)を私が知っていたならば、あの問題に対する考えも発言も違っていたらうと痛切に思った。あの当時NHKの関係者は、この作品の存在を知っていたのだろうか。知っていたら、あのような事件は起こるはずがなかったのではあるまいか。これまでの経験と実績がわたしたち自身のなかに蓄積されていない……という問題をあらためて実感させられたのだ。最後の鷹匠を描いた「老人と鷹」(西尾善介・一九六三)は、その後形放送・一九九二/JAMCO93年

国際版)——の先駆となるものに違いない。ただナレーションが鷹匠を「タカショウ」と呼んでいたのはどうしてか。匠という文字は「意匠・師匠・名匠」など漢語ではショウだが訓読みの鷹が前に来たときにはジヨウと濁ることになっている。

「忘れられた皇軍(大島浩・一九六三)は、日韓双方の政府から見捨てられた在日韓国人傷痍軍人の切ない補償要求運動を追って、すでに風化しかけた日本の戦争責任を切実に問う。右翼の街宣車がまき散らすのと同じ軍歌を使って対極の意思を語らせる演出の手際は明快で鋭い。

「多知さん一家」(市岡康子・一九六五)は中学一年を頭に九人の子供を四畳半ひと間で育てている「肝っ玉おっかさん」一家を、優しく丹念かつユーモラスに描いたものだ。いま同じ暮らしをしろと言われてもそうは行くまいが、子育てについての貴重な「教育番組」である。それにしても、朝はやく独り背広に着替えて仕事に出たきり帰ってこなかったお父さんは、一体どうしたのだろう。

以上の三つとも、作品の正味は二十五分しかない。しかし見おわったあとたっぷり一時間はあったような満足感が残る。主題選択、取材、構成、編集のすべてに手抜きがないのだ。作者たちはわが身の時間を惜しまず作品の時間を大切にしていた。

時の官房長官・橋本登美三郎の容隊によって第二部以下が放送中止になった牛山の「南ウェトナム海兵大隊戦記」は、放送でわたしが見たものとは違い「部内の研究用に再構成された総集編」だったが、放送当時も現地に残っていたカメラ担当・石

川文洋の説明で、あの「生首事件」は、少年が解放戦線(ベトコン)の武器の隠し場所を教えると案内して行ったとき、突如ベトコンに銃撃された(政府軍兵士が畏にはめられたと恐怖にかられた)一瞬の事件だったということが分かった。放送当時番組はそのことを正確には伝えていなかったように思う。

上坪の「引揚港・博多湾」(一九七七)は、十歳で旧満州から引き揚げてきた作者自身の、また「戦犯たちの中国再訪の旅」(一九七八)は、十二年の刑に服して帰国したあとお戦争中の責任を一身に負って生きた彼の父親(元関東軍憲兵中佐)の、体験に裏打ちされている。

牛山のチームが取り組んだ仕事は世界各地で文明の波に洗われ、固有の民族文化を失っていく人たちの最後の姿を記録した映像人類学の貴重な資料になっている。また上坪の作品も同様だが、戦争や貧困をテーマにした作品のすべてが、丁寧かつ冷静で、むしろユーモラスに社会の矛盾を剔抉してみせる。作者たちの視点は常に社会に底辺に据えられている。未開な種族や差別されている人々たちを見下ろしたり啓蒙してやろうとしたりするところが微塵もない。

こういう作品が世に通った時代、それが人々に迎えられる時代があったのだ。優れた作品が生まれる条件として作者個々の能力と努力が欠かせないとは言ってもないが、より大事なのが時代のオリジナリティ、個々人の才能を呼び寄せ引き出すことのできる運動なのである。

(放送番組国際交流センター・理事)

催しとしては非常に有意義だったと思います。これにひきつづく放送人の人と作品のシリーズがどのようなものになるかわかりませんが、会員の参加がより易くなるような日程を考慮することが必要かもしれません。それはそれとして、会員の皆さんのより積極的な参加・協力が望まれます。今回、日本映像記録センターの市岡康子さん、杉山忠夫さん、RKB毎日の木村栄文さんに大変協力して頂きました。厚く御礼申し上げます。

次は何をしたいか？

マルチメディア・多チャンネルが目前に迫る今、会員誰しも、「放送」文化創造の在り方を問い直さずにはいられない。何が出来るか、何をしたいか、随時提案の勝手連の動きとして、この秋二つのシンポジウムが企画されている。

★ Inter BEE '98

特別イベント

放送制作者シンポジウム・共催

『二十一世紀、放送はどこへゆく？』

『文化としての放送』を

創り手はこう考える』

* 十一月十二日 (木)

十時半～十二時半 於・幕張

パネラーに、大山勝美、澤田隆治、橋本佳子、藤井潔、迫田朋子(兼・進行)の各氏を予定。
多数ご来場(無料)を期待します。実行委は沢口真生、斎明寺以玖子両会員。

(※ 国際放送機器展)

★「Vチップ」は必要か？

公開シンポジウムのお知らせ。

十一月四日(水)午後六時より

場所 吉祥寺駅前・武蔵野公会堂。

(定員四百名。入場料二千円以下)

パネラー(案)

鳥越俊太郎(キャスター)・蟹瀬誠一(キャスター)・岩男寿美子(慶大教授)・全国PTA連絡協議会幹部・番組制作者・放送批評家など。

「放送」に関する問題で、世のなかの人びとの、さまざまな関心をよびおこす—そんな、たくらみに満ちた催し物を多く仕掛けることも、放送人の会の果すべき重要な役割のひとつでしょう。

子供とテレビ、具体的にはVチップを話題にしてみたいのです。

少年の非行事件、凶悪犯罪事件などがおこると、テレビの「性と暴力」シンの悪影響」をめぐって、テレビ批判、非難が、活字媒体を中心に盛んに行なわれています。

アメリカ、イギリス並みに、日本にもVチップ導入すべし、の声は、まだ衰えてはいません。

郵政省や文部省も、Vチップ研究成果のまとめを、十一月中につくりあげると聞いています。

放送の制作現場の間は、Vチップ(つまりは放送番組とは誰のものであるべきかの問題)をどう考えるべきか検証の必要があります。

なるべく放送に関連する多くの問題を語れるパネラーたちで、Vチップ導入を入り口に、放送の果すべき役割りとは何か、までを幅ひろく豊かに語りあいたいのです。

(放送批評懇談会との共催を検討中)

「繰り返されること」の意味を求めて

金平 茂紀

「放送人の会」の協賛を得て、去る六月十三日に、東京芝のお寺・増上寺で、テレビのキャスターたちが集合して、ざっくばらんに話をする場をもうけました。真山勇一、筑紫哲也、田丸美寿々、笹栗美根、鳥越俊太郎、田原総一朗といった方々が、趣旨に賛同され参加いただきました。マスコミの仕事にどっぷり浸かっている人間にありがちなことですが、他人事を報じるのは得意でも、自分たちが当事者になって何事かを立ち上げるというのは、ひどく苦手ということがあります。今回もそのことを思い知りました。自分たちでやらなきゃ何も進まないのだ、と。ピラ作り、会場設営、人集め、何から何まで、一人ではとても出来るものではない、と。そこに現われたのが、わが畏友・石高健次氏(朝日放送)。彼の尽力で、初めてシンポが成立したと言っても過言ではありませぬ。彼の人脈でボランティア参加してくれたある女性が準備中に呆れ顔でこう言い放ちました。「あんたら、ほんまイベントの素人やね。こんなんでシンポなんか出来る思うてんの?」全くその通り。彼女らのアイデアで、ピラも作り直し、PRも本腰を入れてやることに。とは言っても、石高氏も小生も、ボランティア嫌だって本業がある。その合間をみての準備作業とあっては、やはりしんどいものがありました。

会場がお寺で、前日まで同じ場所

で葬儀・告別式がとり行われていた。石高氏はさっそくお寺出入りの葬儀社と交渉して、会場に入れるパイプ椅子の値段の値切り交渉をやり始めました。そういうエネルギーが必要なんです。会場が多少線香臭かったのは、前日葬儀に使われた椅子がズラリ並んだからでしょう。

で、シンポ当日の会場のキャスターたちが並んだあたりは、前日まで生花と遺影が飾られておりました。

シンポでの発言でニンマリしたところが一点ありました。田原総一朗さんが、会場に遅れて到着するや、いつもの調子で言葉を速射砲のように繰り返す。曰く、会場に村木(良彦)さんがおられるけれど、昔を思い出すね、こういうシンポはテレビ局のスタジオでやったもんだ、その時に故・竹中労さんと論争になったんだ、例のTBS事件のあとだ云々。田原さんが指摘していたのは、一九六八年四月二十四日、TBSのHスタジオで開かれたティーチ・インのことだと思われま。またTBS事件というものは、「成田事件」のことです。その日からちょうど三十年。TBS事件は「坂本弁護士ビデオ事件」として繰り返され、奇妙な符合のように、二つの「TBS事件」の後に、またひとつの集いが繰り返されたわけです。その符合の意味、「繰り返されること」の意味を求め続けることから、どうも逃げられないようです。

(実行委員会代表)

活動の実施について

世話人等が話し合った結果まとめた会員活動実施のルールは、概略次のようなことです。

活動・イベントを提案する人は、先ず幹事会に諮って「放送人の会」の活動としての承認を受ける。そして協力者を探して自らチームを作り、提案した活動を実施する。すべて自前が基本、です。

もちろん幹事会や事務局は出来る限りの協力を惜しみませんが、当面実行を任せられるだけの余力は無いのが実状です。

予算面でも、活動の規模や必要費用に応じて、若干の補助はできますが、財務基盤が確立するまでは、独立採算を目標に努力して下さるようお願いいたします。

とは言え、不景気な風潮はものともせず、どうか皆さん、大胆で愉快な、本質に迫る企画をどしどし考え出しアイデアを事務局にお知らせ下さい。幹事会(定例は毎月第三水曜夕方から)で一緒に、素材集め、機材調達、会場探し、人選、広報など会員ネットワークを活用し、実現のため知恵を絞りますよう。

* 九月幹事会は十六日夕、事務局で

事務局(月・水・木)が
夏休み明けの九月一日付で
大橋淑子さんにバトンタッチ
されました

「放送人の会」

世話人

赤井美子(幹事)

磯野恭子(幹事)

市岡康子(幹事)

遠藤利雄(幹事)

大蔵雄之助(幹事)

大原勝利(幹事)

大崎勝美(幹事)

岡崎領樹(幹事)

大勝静夫(幹事)

加藤朝清(幹事)

勝部茂夫(幹事)

岡部信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)

川口信一(幹事)